

鶴丸高校講演「地球を歩く 鳥の目と虫の目で」

(2004年4月19日)

朝日新聞記者の川崎剛です。丁寧なご紹介ありがとうございました。

きょうは、鶴丸高校の創立110周年、大変おめでとうございます。生徒のみなさん、おめでとうございます。国でも会社でも、学校でも、ロックバンドであろうと、宗教組織でも何でもそうですけれども、自分が属する集団に誇りが持てるということは、それほど誰にでも与えられた特権ではないかもしれません。間違いなく鶴丸高校は、みなさんが誇りを持つことができる学校だと思います。

石踊政昭校長先生をはじめ、教職員の皆様もおめでとうございます。きょうのよき日を迎えるために、準備に奔走されたことに感謝と敬意を表します。

きょうは、在校生の家族や、私もその一員ですが、卒業生もたくさん参加しています。ともに、鶴丸高校が百十歳の齢に達したことを喜んで、二十世紀に培った私たちの伝統を伝えとともに、若い人々が生み出す新しいエネルギーをサポートして百十一年目の出発点にできれば素晴らしいと思っています。

関東地方にいる卒業生たちは、旧制鹿児島一中、鹿児島一高女、それから、昭和二十四年から併設されていた鶴丸高校の夜間部の卒業生たちといっしょに東京一鶴会(一中、一高女の「一」と鶴丸の「鶴」でいっかくです)という合同同窓会を三、四年に一度開いています。3月6日に第七回の東京一鶴会を開きました。私たち一九七三年(昭和四十八年)の卒業生がプレゼンテーションを担当しました。

そのとき会場でお見せした映像です。第二次大戦(太平洋戦争ですね)の空襲で焼ける前の鹿児島一中の姿です。一中四十九期の田良島昭(たらしま・あきら)鹿児島大教授が復元された全景だそうです。この建物は、昭和二十年の空襲で焼けて、芋畑になったそうです。私たちは百十年間に残されている写真を紹介しながら、一中、一高女、鶴丸、そして鶴丸夜間部の歴史を振り返ってみたのですが、その中で、先輩から衝撃的な証言が出てきたのです。

鶴丸第二回(昭和26年)卒業で、(在校生のみなさんには西暦の方がよいかもしれませんが、一九五一年です)東京ディズニーランドのある浦安市から参加した小宮路伶子さんが、たまたま私の隣りに座って教えてくれた話ですが、戦後、鶴丸高校という名前は、生

徒たちが投票で決めたのです。昭和二十三年四月の学制改革で、一高女が高等学校に昇格し、鹿児島県鹿児島高等学校第三部という名前がついていましたが、生徒たちが希望する校名を投票したそうです。

小宮路さんは、一中と一高女が一緒になるのだから、第一高等学校がいい、と思って投票したそうです。実際にトップは第一高等学校、そして第二位が鶴丸高校でした。

しかし、第一高校という序列を連想させる名前は、当時の教育委員会が難色を示すかもしれない、という配慮が働いて、どうやら鶴丸になったそうです。小宮路さんは、「GHQ（高校生は知っているかな、連合国軍総司令部ですけれども）GHQが認めなかったと記憶していっちゃったんですが、同級生の方が、教育委員会への遠慮だったと教えてくれました。

それでも、学校の名前を生徒が投票で決めようというのは、いわゆる戦後民主主義の雰囲気分かる逸話だと思います。

実は、きょうは私の同級生もたくさん、この会場にきています。彼らはとても心配してくれているのだと思います。「川崎が講演すっち、あいはいっぱん、ほがなかったがね」というのが、新聞記者の職業的方法論として私が自分を客観的に見てみると、偽らざる感想ではないかと思うのです。私はもちろん、田中さんのようにノーベル賞を取ったわけではなく、松井のように大リーグで活躍したわけでもありません。福原愛ちゃんのようにかわいくもない。自分がこの場にふさわしいとも思っていません。今、会場が暗くて、とてもいいなあと思っていますけれども。

ここにこうしてげんなかいをして立っているのは、東京鶴丸会会長の宗村森信さん。昭和四十五年（1970年）卒業の先輩で、東京で弁護士をされています。その先輩が「やれ」と言ったからです。

ある日の正午を十分くらい過ぎていたと思います。腰の左にさしている携帯が鳴りました。

「宗村です」と。

私がどこにいたかという、朝日新聞社の8階の食堂のそばコーナーに並んでいました。

「川崎君。四月十九日は何か入っていますか？」。そんな先のことは分かりません。「いえ、今のところ何もありません」。

「講演してくれませんか」

「え、えっ？」

「鶴丸で講演してもらいたいのです」

ちょうど、その時に「次の人は？」と言われたので、「ざるそばにちくわ天をつけて」と頼んで、しかし、あまりにも大胆の提案。

「はい、ざるそばとちくわ天」。左手に携帯を持って、右手にお盆をかかえているというのは、宗村さんと複雑な話をするシチュエーションとしては、かなり難しいと思います。まわりはざわざわしているし、そば行列の後ろからは押される。「いや、その、あの。えーと。分かりました。私も誰か適任者を探します。この場は、とにかく、どうしようもなくて私でもいいのならば、一応お受けします」

でもね。みなさん。そういうことって、人生にはあるのです。

私が朝日新聞の記者になったのは、一九八〇年（昭和五五年）なのですが、六年目の一九八六年に、北九州市にある西部本社の社会部という部署で、事件記者をしていました。警察や裁判の担当です。

そしたら、ある午後、ポケットベルが鳴った。まだ携帯電話のない時代で、新聞記者はみんなポケットベルを持っていました。

公衆電話から社会部のデスクに電話しました。

「川崎です。ポケットベルが鳴りました」

「ああ、部長が呼んでいた」

「川崎です」

「おまえ、韓国に行ってくれないか・・・」

「ええ??」

一九八八年のソウル・オリンピックの二年前にアジア大会が開かれました。初めて中国がソウルに代表団を送った。まだ中韓の国交のない時期です。そこに、社会部から私に行けということです。

「おまえが韓国語をやっているって聞いたから」

実は、その年一九八六年にNHKが「アンニョンハシムニカ」という韓国語講座を始めました。それを録画するために私はビデオを買いました。もちろん、事件記者をしていますから、警察回りの日常で、アットという間に挫折していたのですが・・・。しかし、周りの人は韓国語をやっているらしいと噂をしていた。で、韓国語ができるらしいな」と言われて、「ええ、まあ」と、結局否定はしなかった。

私はソウルに一カ月いました。

韓国語ができないのは、すぐばれましたけどね。

それでも取材は、ソウルの金浦空港のロビーで爆弾事件があり、十数人が死亡する事件があったり、戒厳令のようななか、中曽根総理大臣が開会式に来たり、南北朝鮮の南に初めて中国が代表団を送ったり、いろいろあったアジア大会でした。その翌年、東京本社の外報部に転勤になりました。外国のニュース、国際ニュースを扱う部署です。

海外の特派員になりたいとは思っていたけれども、どうすればいいか全くわかりませんでした。南アフリカの人種差別政策であるアパルトヘイトが盛んなころで、アフリカの勉強を始めていたので、アフリカの特派員になるとばかり思っていました。一九八九年、この八九年という年は第二次大戦後の世界史上で非常に重要な年です。ベルリンの壁が崩れ、東ヨーロッパの社会主義が崩壊し、中国では天安門事件が起きました。その一九八九年の暮れ、呼ばれて言いつけられたのは、アフリカではなく、アメリカに行け、ということでした。ワシントンに転勤になったのです。

編集局長にあいさつに行きました。

「きみ、アメリカは何年ぶりかね」

「行ったことないのです」と正直に言ったら、編集局長の顔がすうっと青ざめてきました。何かの誤解で、私がアメリカに留学したという風な話を信じていた節があります。社会部時代の韓国語に続く、私にとっては幸運な誤解というべきなのでしょう。

つまり、考えてもみななかったようなこと、通常ならできそうもないことが突然、降ってくるのが人生にはあります。そのとき、「できません」と私は言わなかった。すぐ「できます」とも言わなかったけれど。恥ずかしいながらも、せっかく機会がきたのだから、やってみようという風に考えました。若かったから失敗が許されたということもあるでしょう。

考えてみたら、一九七三年（昭和四八年）に卒業して、三十一年たちました。あつという間のような気がします。この体育館も覚えています。

おとし、東ティモールというできたばかりの新しい国に行き、その前の二〇〇一年には、北朝鮮で非常に厳しい取材もしました。取材に行った国を数えてみると、56の国と地域に行ったこととなります。地域というのは国であると国際社会が認めていない香港や台湾とかパレスチナなどです。ずいぶん、旅をしてきたなあ、と思います。その間に、考えることもいろいろあった。みなさんのように若い人に話してみたい経験もある。そうか。母校で講演するというのはすばらしいことではないか。きょうはみなさんにお話する榮譽を与えられたことを非常に幸運に思っています。宗村先生は、きょう会場にいらっしゃっています。宗村さん、本当にありがとうございました。

先々週の木曜日に、イラクで日本人が人質になる事件がありました。私の席の隣の電話が鳴って受話器を取ると、中東の衛星テレビ局アルジャジーラからでした。おとといまで、ほとんど寝る時間もなく、事件に追われていました。

一九九〇年のニカラグア、皆さん地図を思い出してほしいのですが、中米のニカラグア、昔サンディニスタ左翼政権がアメリカの干渉で倒れる、というような国際政治上の動乱があったところです。それから湾岸戦争のときに、私はサウジアラビアで三カ月取材しました。一九九一年の第一次湾岸戦争ですね。イラクのフセイン大統領が生き残った千背負う。それから、九一年にクーデターがあった直後のハイチ。アフリカのソマリア、ルワンダやザイール、今コンゴといっています。東ティモール、北朝鮮など、戦争や動乱を取材することが比較的多かった記者だと思います。

渡航禁止令が出たところに入っていく、ということは非常に多かったし、外務省から「その地域から出てほしい」と勧告されたことは何度もあります。しかし、私の基準は、他国のジャーナリストや国際赤十字、国連の人道支援が入っている間は、撤退しない。一番、前線にいたい。ただし、自分の身は自分で守るということでした。

フリーの人々と何が違うか、というと難しいのですが、安全を買うお金は彼らよりあるかも知れません。もちろん、危険なことはありました。拘束されたことも何度かあります。脅しも数知れず、肋骨も一回折られたことがあります。運がよかっただけかも知れません。

今のイラクはそれと比較にならないくらい荒れています。もはや、まったく取材ができなくなっている。朝日新聞では現在、四人の記者をバグダッドにおいでいますが、あす、あさってで二人にします。イタリア人人質の殺害などで、情勢が急激に悪化しているという判断から、アラビア語のできる川上君と小森君の二人の特派員に限って残すことにしました。支局をおいでいるパレスチナホテルは嚴重に警備されていて、敷地内は一応安全ですが、ロケット砲攻撃の可能性がないわけではない。今、あぶないのは誘拐です。外に出る取材は、イラク人の助手を派遣している。インタビューは基本的に、相手に来てもらってするしかない。バグダッドの北のファルージャで、反米武装勢力が、バグダッドにゲリラ戦を広げて、混乱を広げようというインテリジェンスがあり、ある安全保障会社は、外国人は街を歩かないように、商店は店を開けないように、勤め人は職場を休むように呼びかけています。ほとんど内戦状態です。アメリカがこれを力以外の何かで押さえ込めるとい見通しは今のところありません。

記者たちを最後にイラクから待避させるとしたら、陸路が武装勢力がいる以上、ヨルダンのアンマンに空路で脱出する以外ないわけです。まだ、民間の定期便は飛んでいます。

空港と市内を結ぶ幹線道路も確保されています。今後も安全情報には細心の注意を払い、全員撤収も視野に入れながら取材を続けてもらっています。自衛隊がいるサマワからはすでに十三日に撤収しており、次の自衛隊取材のヤマが来るまでサマワに記者を置く状況ではなくなりました。

今度の人質事件は、日本人にとっては大変なことでしたが、何か、非常に情緒的な受け止め方ばかりで終わりました。「助かってよかった、よかった」といっていますが、他の国の外国人の誘拐はその後も続いています。ファルージャでは、イラク人七百人、アメリカ兵八十人以上が死んだことを忘れてしまった。イラクの現状において、日本ができることはあまり多くはないと思いますけれども、情勢は知っていただきたいと思います。

人質になった人々について思うことをひとこと述べておきます。みなさんも自分に引きつけて理解していただきたいと思います。テレビのワイドショーや芸能レポーターのようなものを取材と思わないでください。首相官邸で小泉さんを追っかけるのは取材ですが、メダカが群れているようなものです。

日本の若い取材者に欠けがちなのは、極限的な体験と、その体験から長い時間をかけて考える過程だと私は思います。もちろん、命の危険を伴うそのような体験自体は、敢えてするものでもなく、普通の人生にはないほうがマシではあるのですが。

たまたま起きてしまったそのような体験は、今度の五人それぞれにとって実に重要な機会となるはずです。そのように総括していただきたいと希望します。今度の体験は、マスコミ的取材の枠を大きく超えることは間違いありません。取材とは、単なる質疑応答のことではなく、甘ったるい人生観を覆すような思考の始まりだと私は思います。

一九九一年にカリブ海の小国ハイチでクーデターがありました。この国は、先日もまた、政情不安でアリスティド大統領が国外退去でアフリカに逃げたので、国際情勢に詳しいかたはご存じかも知れません。一九九一年九月に私が入ったときは、すでに日本大使館は現地スタッフを残して全員退去していました。海外青年協力隊員も退去していた。残っていた日本人はキリスト教の修道女が二人。そして、なんと鹿児島県出身の女性実業家が一人でした。米国向けの市場に高級な衣類を縫製して輸出する工場を経営していました。食事に呼ばれて話をしているうちに鹿児島県から戦後アメリカに来て、ハイチで成功された方だと分かりました。私は新米海外特派員でしたが、世界の津々浦々に鹿児島の方がいらっしゃる、日本を離れて各地に根を生やしていることを知りました。イラクの話は、後で質問があったら、お答えします。

私是一九八二年の戒厳令下の韓国、八九年のリビア、九〇年のニカラグアに始まって、

九一年の湾岸戦争。九一年のハイチ、九四年から九八年のアフリカと、戦乱の地で取材することがよくあったと申し上げました。そうした中で、最初に本格的な戦争報道に携わったのは、イラクがクウェートを侵略して、アメリカを中心とした多国籍軍が展開した一九九一年の湾岸戦争でした。

これが私の記事です（スクリーンで写真を見せる）。一九九一年の一月から三カ月、サウジアラビアで従軍取材をしました。あの時、戦争を遂行する国家機構のチェックをする側のメディアの限界を感じました。例えば、戦争をする側は、とくにアメリカですけれども、ナショナル・テクニカル・ミーンズといいますが、人工衛星ですね。人工衛星からのインテリジェンスをもとに戦争をする。新聞社やテレビ局が人工衛星を持つことは当時は不可能だった。最近では、フランスやロシアの人工衛星による北朝鮮の写真を買ったりすることがありますが、当時はそれほどでもなかった。

今の米国のブッシュ政権や小泉政権は、メディアに対して（ちょっと注意して言いますが）メディアをミスリードすることを自分なりに正当化している気がするんです。これは少なくとも戦後のメディアと、ある程度普通の民主主義の国である、たとえばアメリカなどの権力との関係ではルール違反なんです。自分に都合の悪いことでも言う。その上で有権者の判断をおおく。これが民主主義の前提です。その透明性が自由な報道の信頼性を担保していたわけですが、それがあの湾岸戦争のときに、アメリカの思うように情報を操られてしまったなあという気がします。たとえば、湾岸戦争の最中、アメリカ軍や多国籍軍がペルシャ湾岸で一生懸命上陸演習をするんですね。で、最後に地上戦となったときに、彼らは水陸両用艇で上陸するやり方ではなくて、西の砂漠側から戦車で攻め込んでいった。最後の記者会見で、当時のシュワルツコフ将軍が、我々に言いました。「メディアがペルシャ湾側から上陸する、上陸すると何度も書いてくれた。相手にそれを信じ込ませて大変、戦争がやりやすくなった」。私の隣りにいたアメリカ人記者が怒りました。「あなた方はほかにどんなことで我々をだましたのですか」。それが一九九一年です。

きょうは、私の昔の記事を一つ紹介したいと思っています。一九九七年、ザイールという国がありました。モブツという独裁者がいました。私は九四年から九八年までアフリカにいましたが、まだ、インターネットがそれほど普及していませんでした。私は多くの現場で写真を撮りながら、それを即座に東京に送る手段がなく、紙面に載せてもらうことがあまりできなかった。わが家の押し入れの大きなスーツケースには一杯のネガやプリントが残っていますが、きょうはそのうちの数枚をお見せしたいと思います。

初めてザイールに行ったとき、私は隣国のルワンダという小さな国の国境を歩いて陸路で入りました。みなさんはバナナ・レパブリックという単語を知っていますか。バナナ・

レパブリック（バナナ共和国）というのは、今やファッションのブランド名にもありますが、中南米で独裁者とその取り巻きでほとんど機能していない国家をバナナ・レパブリックといったんです。そういう国がアフリカには、まだたくさんあります。ルワンダという小さな国では、一九九四年にフツ族とツチ族が部族の争いをして、三カ月で八十万人が死にました。最終的にツチ族が優勢になりましたが、フツ族が隣のザイールに逃げました。このザイールという国は今、コンゴ民主共和国と名前を変えました。ムルアカさんという鈴木宗男さんの秘書の出身地です。

それで、私がルワンダから陸路でザイールに入ったときの話。

兵士が近づいてきました。三カ月前まで日本の自衛隊がPKOとして展開していたので、日本人記者を知っていたのでしょう。兵士は、まず持っているカラシニコフ銃を私につきつけました。その後、銃をおろして、パッと敬礼しました。そして、にこっと笑って私に手を突き出しました。すばらしいジェスチャーですね。「私はあなたを殺すことができます。しかし、殺す気はありません。仲良くしたいし、このように尊敬しております。だからお金をください」。私はバナナ・レパブリックに入ったことを理解したのです。

そのような場所で私がとった方法論は、まず自分は目に徹することです。虫のように。まず見えることをまず記録していくそういうやり方でした。時間が前後しますが、一九八九年、リビアという国に行ったことがあります。カダフィ大佐という独裁者がいます。リビア革命二十周年で、世界中のメディアが集められて、集められたのはいいけれども、「ホテルにたくさんの部屋がない」という理由で、港に停泊している船に押し込められました。町を出歩かないようにするためですね。記者を管理しやすいように。取材のしょうがなくなりました。そこにずっと閉じこめられているから。それで、何とか抜け出して、首都トリポリの町まで、ちょっとした砂漠みたいなところを二、三キロ歩いて町まで行って市場を歩いたりして、見えるものをずっと記録しました。英語を話す人はほとんどいないし、私にはアラビア語は分からないので、何を言っているのか分からない。市場でどんなものが並んでいるか、映画館に入ってみたら、「ロボコップ」というアメリカ映画をアラビア語の吹き替えで上映している。見えるものだけをそういうふうを書いていくという、そういう取材でした。

みなさん、お気づきだと思いますが、新聞の情報は基本的に聞いたことで組み立てられます。誰々さんが何々と言ったという形で。特に、アメリカの新聞などでは、誰々セッド（said）誰々セッドと出てきますね。それに対して誰々はこう言った。その組み合わせで記事をつくっていく。リビアで私は、この手法は使えなかった。その代わりに、自分の目で代わりをしなければならなかったのです。エスコートなしで三回くらい町に出ました。町で、情報省に見つかって、国外退去にすると言われましたが。

二〇〇一年に行った北朝鮮なども似たような感じだったと思います。一人で歩くことはできない。常に向こうの政府機関の人が一緒にいるわけですから、聞いて通訳してもらっても、それが相手の本心かどうか分からない。こういう質問にこのように答えたというのはあるわけですが、それが本当かどうか、分からない。だから、まず見ることを、この場合は虫のように見ることをこころがけます。

さて、きょう私がお話しするのは、ザイールのある山の中での出来事です。ひとことお断りします。日本の新聞やテレビでは、死体の映像を原則として使いません。これからお見せする写真の中には、死体の写真があります。あらかじめご了解ください。これが戦争だということでもありますし、日本やごく少数の先進国以外では、死は日常の映像であるというのはみなさんも想像できると思います。日本だって、最初からこんな衛生的な国ではなかったし、たとえば阪神大震災の時には六千人が死んでいます。でも、その映像はあまり紹介されなかった。

ルワンダから逃げたフツ族の難民キャンプがザイールにありました。ツチ族の武装勢力が難民キャンプを攻撃したので、それまで囚われていた多くの難民がルワンダに帰還したのですが、一部は報復を恐れて、フツ族の武装勢力とともにザイールの奥地、山の方に逃げました。そうした人々がどうなっているか調べようと、山の中に入っていった取材です。逃げていたフツ族の民兵が山の中で村民を虐殺しているという話を聞いたからです。CNNテレビの契約カメラマンをしていたニック・ヒューズと二人で、四輪駆動車二台を調達してでかけました。腐りかけた丸太橋を二カ所で直して、車を何とか登らせていったのですが、途中であきらめて、徒歩で登りました。汗だくで三十分くらい登ると、突然村があって、焼き打ちと虐殺の現場にでくわしてしまいました。方角の検討は勘だったのでまったく偶然に実際の現場を見つけてしまったわけです。生き残った村人の話を聞き、焼けた家を撮影する。そういう普通の取材をして、通りかかった草むらの陰で（写真を見せて）少女がこのように横たわっていたのです。ニックは上から彼女を撮影し始めました。そうしたら、少女がかすかに動いた。息をしていました。あわてて水を飲ませたのです。彼女は生きていました。水を飲ませると、こんな風に立つことができました。頭の右側に傷が見えますか。深さが二センチくらいの傷でした。車まで運んで赤十字の臨時病院に送り込みました。衛星電話で記事をメモのまま吹き込んでいる最中、現地で雇っていた通訳のノベルがかけこんできて、名前がニイラバンギダという少女で十歳と教えてくれました。これからその記事を読みます。この日の取材は、こういう記事になったんです。

「フツ族民兵、村人殺し敗走 ザイール東部・マレヘ村に入る」(一九九六年十一月二十日 朝刊 千二百三十八字)

【マレヘ村（ザイール東部）19日＝川崎剛】死体だと思った子供が、かすかに動いた。抱き上げて水筒の水を飲ませると、ごくごくと飲んで、うつろな目を開けた。頭の右側に残る深さ約二センチの傷は三、四日前のものに見えた。敗走するフツ族民兵が置き去りにしたルワンダ難民の少女だった。赤十字の手は、この村にはまだ届いていない。私たちは少女を四十キロ離れたゴマの病院に運んだ。十九日、たくさんの村人が殺され、荒らされたザイール東部のマレヘ村に入った。

マレヘ村は、ゴマの西三十キロにあるサケから山道を十キロ北上したところにある。四輪駆動車で進めなくなり、徒歩で約三十分登った斜面に集落がへばりついていて、焼けた家の前で、女性が一人立ち尽くしていた。ナムカラ・ダフローズさん（二五）は「インテラハムウェが来て、父と夫を殺した。食糧もみんな取っていった」と無表情に話した。

インテラハムウェは、ルワンダ旧政府軍とともにザイール東部の難民キャンプで一般難民を人質にしていたフツ族の急進派民兵組織だ。兵士は合わせて約四万人。一九九四年にルワンダでツチ族を大虐殺した勢力だ。ザイール東部を制圧したツチ族系など武装勢力連合に追撃されている。

数十メートル離れた焼け跡には、村人がまだ埋葬していない男性と女性の射殺死体があった。別の焼け跡には、生きたまま焼かれたと見られる黒こげの遺体があった。

水を飲んで目を開けた少女に、東アフリカの共通語スワヒリ語で「ハバリ？（ご機嫌は）」と聞くと、少女が「ムズリ（良い）」と答えた。条件反射だろう。目は宙をさまよっていた。村人に頼んで少女を担いで車のある場所まで下ろし、ゴマの病院に運んだ。

少女は、ルワンダ北部ルヘンゲリ出身のニイラバランギダさん（一〇）。インテラハムウェと行動を共にしていた難民で、四日前、戦闘の流れ弾が頭をかすり、「もうだめだ」と判断した母親から置き去りにされたという。

インテラハムウェは十五日、立てこもっていたムグンガ難民キャンプを捨てた。このため、人質のようになっていた一般難民約七十万人がルワンダに帰還し始めたが、逃げるインテラハムウェはザイールの山沿いの村で略奪と殺害を続けている。マレヘ村には、十六日朝、約二千人がなだれ込んできた。村人を殺し、家を焼き、食糧を奪い、逃げたという。村人は彼らと同じザイール系のフツ族だった。

生き残った村人は、バナナ畑に逃げた人々である。戦いは十六日中続き、その夕方にフツ族民兵はマレヘ村を捨てたという。

ゴマの病院に運ぶ途中で、少女は私のあげたチョコレートを食べることで、助かると思った。この季節に、毎日午後降るにわか雨が彼女を生かしてきたのだろう。同行したジャーナリストとともに、私はゴマで赤十字にマレヘ村の惨状を伝えた。

これ（写真）が、その記事ですが、お見せした少女の写真はその日に送ることができなかったのも、全然別な写真が使われています。今のインターネットが使える環境にあれば、

写真も送れたかもしれません。

この日はこんなに写真をとっているのですが、その翌日には実は一枚しか写真がないのです。これです(写真)。この朝は、CNNの記者のキャサリン・ボンドも加わりました。前日に、焼き打ちの村を見つけたので、きょうもネタになると思ったのでしょうか。山奥のさらにその奥で、それまでよりはるかに栄養状態の悪い男性難民三人を見つけました。つえにすがりながらようやく歩ける感じです。彼らは約二週間山の中を放浪して、武装勢力から逃げていたのです。「山の向こうにはまだ数千人はいるはずだ」と教えてくれました。

ここは、国連援助機関もまだ入っていないので、ジャーナリストが一番前におり、私とニック・ヒューズがその中でも一番前にいたわけです。

難民の話聞き終えて、普通テレビがやることなのですが、周囲の状況を撮っておこうと、ニックがカメラをぐるっと山の方に回したときに、ダダダダダダッという機銃と小銃の乱射が始まりました。

マイクを放り出して逃げたキャサリン・ボンドの恐怖に引きつった顔を、私は二度と忘れたいと思います。ニックとキャサリンとザイル人の助手は道路脇の草むらに飛び込み、私は四輪駆動車の後ろにはいつくばりました。ニックが聞きました。

「ゴー、そこから何か見えるか」

かすかに見える兵士たちの照準を見て私は答えました。「イエス、ゼーアー・ターゲティング・アス」(They are targeting us. こっちをねらっている)。その後、会うたびにニックとキャサリンは私が言った「ゼーアー・ターゲティング・アス」という言葉を忘れないといいますね。

銃撃は約二十分、続きました。このときだけは、「これで死ぬかも」と思いました。兵士たちがじわじわと近づいてくる。こちらが武器を持っていないことは分かったのだと思います。二十メートルくらいの距離に近づいたときに車の後ろにいた私は両手をあげて立ち上がりました。「ヌソムジャーナリスト」。われわれはジャーナリストである。これはかたことのフランス語です。私たちは記者であって、兵士ではない。そうやって戦闘地域に入り込んでいたのですね。すぐに帰れといわれたので、そうしました。それが、この日の写真がこれ一枚しかない、理由です。

そうやって私は、アフリカのさまざまな現場で、目になろうとしてきました。虫の目。現場に行く。そして見る。われわれの現場は要するに人々の悲惨なところを見るわけです。もちろん「かわいそう」とは思います。しかし、先ほども言いましたが、極限に近い現場というものをたくさん経験すると、何か別のもの見えてきます。

ルワンダやソマリアの内戦や、難民、人道援助の現場、環境問題、そういういろいろなことを取材してきました。そうやって旅を続けていると、虫の目で見ていた世界が、もっ

と上から見えてきます。鳥の目ですね。

アフリカから見ると、ものがよく見える気がします。世界の構造が簡単というか。歴史も比較的単純です。そうした鳥の目から見てみると、例えばアフリカの人たちが自分たちのことを考える癖が見えてきます。

アフリカの知識人はみんな言います。なぜ、アフリカは貧しいままなのか。なぜアフリカでは紛争がなくなるのか。彼らが最初に言うのは「植民地三百年の歴史の遺産」です。うーん。確かに一部は正しい。現在のアフリカを歴史的に規定する条件の一部だとは思いますが、それだけでは説明できない現在というのはたくさんあるのに、アフリカの人たちは、悪いことは全部植民地支配のせいにする傾向があります。

でも、いろいろな地域を見回してみると、そういう知的な傾向、つまり現在何か悪い状況というのは、自分にいっさい責任がなく、自分が影響を及ぼすことができない他者のせいであると考えられる傾向があります。彼らが悪い、彼らのせいだというような。グローバリゼーションが悪い、不良債権が悪い。そういう自分以外の他者のせいにする傾向は、実はいろいろなところで見いだせるのかも知れない。もちろん日本でもです。

私はきょう、マッピングということをお話ししたい、と思っています。別に私のオリジナルでも何でもなし。いろいろな人が言っていることの受け売りです。だけど、さまざまな国を歩いて、日本に帰ってきて、考えてみると、日本の若い人たちがなるべく早く自分のマッピングをすればいいと思うようになりました。

マップというのは、もちろん英語で地図のことですね。もともとはテーブルクロスとかそういう意味のようです。マッピングは、自分のいる場所をマップ、つまり地図の上に落とすことです。自分がどこに立っているのか、その座標を地図に落とすこと。マッピングが、みなさんができる自立するための知的な作業の一步ではないか。

ものすごく単純に言うと、普通みなさんのように受験校の生徒なら、偏差値で自分をとらえてらっしゃるかも知れません。自分は偏差値六十とか、七十だとか。でも、偏差値はその集団の中で、たとえば鶴丸の一年生のこの集団の中で、自分がどの辺にいるかを示すに過ぎません。みなさんは、たとえばケニアの同じ年齢の人とは比べられませんね。技術的にはできますよ。同じ問題を出せばいい。アメリカくらいなら比べられかもしれません。もっと言うと、私は三十年前に鶴丸の生徒でしたが、みなさんと十八だった私との比較というのもあまり考えられない問いですよ。同じ小さな集団のなかでの、点数だけの比較で自分を規定していいのか、それでマッピングができるだろうか、ということです。私は

できないと思います。

クラスの中で、県の中で、全国模試で、日本で、みんなが偏差値。同じ年齢の人たちだけの集団で考えるのではなくて、その数年前の人たち、三十年前の人たち、中国の同世代、韓国の同世代、アジアの人々。歴史上のすべての十八歳。

そういうことが鳥の目で、自分が世界のどこに立っているかを見ることだと思います。自分が立っている場所を確認することだと思います。

いろいろなところに行くと、その人々はあらゆる主張をします。それを聞くことが異文化理解とされます。鶴丸高校も三、四年前に中国に修学旅行に行ったことがあるでしょう。中国や朝鮮の人たちが、戦前の日本の侵略行為や、現在の日本人の歴史認識に対して怒っているということは、みなさんたちもご存じでしょう。

みなさんは、なぜ彼らが怒るのか分かります。なぜなら、彼らが怒るもととなった歴史的事実をだいたい知っているでしょうから。でも、中国や朝鮮の人たちは、日本に来るまで、日本人が実は鬼でも悪魔でもなく、普通につきあえるという印象を実はあまり持っていないと思うんです。来てびっくりするのですね。なぜなら、中国や朝鮮の教育はまだ公式的で、侵略の歴史がすべてだからです。

韓国のとても有名な学者の池明観（チ・ミョンガン）さん。この人は、一九七〇年代にソウルから「韓国からの通信」というレポートを送っていた人です。池明観さんに印象的なことを聞きました。日本の植民地時代の朝鮮人はもちろん、差別されたんですけども、でもお互いに顔をつきあわせ、近くに住んでいたから、日本人は朝鮮人を殴ったり、いばっていたりしたけれど、家は清潔だった、とか、子どもはみんなよく勉強した、とか自分たちと比べることができた。

しかし、同じ場所に住まなくなって、何となく対立してしまうと、公式的に教えられることだけが一人歩きします。みなさんが東京や鹿児島県で会う、日本のことを本当によく知っている中国人は、実は非常に少数派です。中国の学生は日本について鬼子としか知らない。国家が歴史をそのようにしか教えないんだから。不公平ですよ。

みなさんが、一対一で中国の人と会うとき、その人々にどう説明できるでしょうか。不公平だから、話すのをやめるか、そうじゃないですよ。仕方ないんじゃないかなと僕は思います。それを引き受けなければいけない。

日本を侵略しただけの国、として認識する人々ともつきあって、言葉だけでなく、みなさんの態度で、トータルに日本やみなさんが、今、仲良くしたいということを知って貰おう。憎しみやこれまでのあつれきを捨てて、手をたずさえていくしかないことを説得しなければならぬ。

確かに、一対一の言論が成り立たない。そういうシチュエーションですし、不公平な関係ですが、それを引き受けてつきあっていくしかないと思います。

社会に対する振る舞いにおいて、大切なことは、相手側に客観的にどう理解されるかを、まず、配慮することであり、こちらが主観的にどういう意図であるかをいくら言い立てても、あまり通じないと思います。「私はこういうつもりだ」と思っても、相手がそう受け止めないことは多いでしょう。自分たちに課すには過剰な責任かもしれないけれども、しかし、仕方がないんです。

みなさんは、もし、そういうシチュエーションになった時に、社会を代表して、自分たちだけでなく、つまり、自分がどう思うかではなく、自分たちを、自分に反対する人々も含めて、前の世代、戦前の日本人などを、一緒に代表しないと行けない。関係ないと言わないで、それを引き受けることです。

イスラムの人々が自らに持たせよういろいろな社会や歴史の制約を知って話す。朝鮮や韓国の人々が持たせよう、東アジアの若者が持つであろう、アフリカや東アジアの若者が持たせよう制約を理解した上で話す。そういう態度を持たないと行けないと思います。

なぜなら、日本は戦後世界で、そのようなことが理解できる、スーパーなポジションにいるからです。自分のことばかり主張するのではなく、勝ち負けだけで判断せず、自分の属する集団だけでなく、そうでない人々も代表する覚悟。それを持ってないかな、と思うのです。

今、アメリカを見ていると、いささか子どもっぽく見えますよね。ヨーロッパの方が大人に見えます。日本は、アメリカのように子供っぽくないほうが、いい気がします。自分たちだけよくなる、という歴史の段階があるとしたら、それは、皆さん方の上の世代、私たちの世代あたりで終わったんだ、そういう時代は終わったんだと行っていいでしょう。

なぜブッシュ大統領はあれほど怒っているのでしょうか。なぜ、イラクのイスラム教徒はあれほど怒っているのでしょうか。「分からない」と放棄するのではなく、わかってみよ

うとすべきだと思います。なぜ、彼らはこのように怒っているのか、理解しようとする。そのことによって何かをするというのではないのですが、相手のことを理解しようとする知性が、たとえば、今のアメリカ合衆国のリーダーには見られない気がします。

自分が正しいと主張することを疑ってみる知性を持ちたいと思います。。私が正しいと思って話しているこのことは、しかし、間違いであるかも知れない。正しいと信じることをどのような言い方で伝えるか、ということも問題になります。自分が正しい、正しい、正しい、と叫ぶだけでは相手に伝わりません。アメリカ合衆国が、いかにテロとの戦い、テロとの戦い、テロとの戦いと繰り返しても、世界の半分以上の人が、そうではないと思ってしまうのは、ひとつには、自分が正しいと思うことをいかに伝えるかのマナーの問題があると思います。

さて、その上で、ものを見る知性の態度を考えてみたいと思います。一つには、自分をいかに客観化してみることができるか、第二に自分が知っていること、考えることは、間違っているかも知れないと疑うこと。それが知性だと思います。わからないというのが知性の基本的な構えではないでしょうか。「私にはわからない」「だからわかりたい」「だから、調べる。考える」「何だかわかったような気になった」「でも何だかますます分からなくなってきたような気もする・・・」。まあ、螺旋状態にぐるぐる回るように、パッとしないけれども、それが一番誠実な物の考え方だと思います。自分が何を知らないか、何ができないかということを見るためには、学校や、社会など、自分自身を含むシステム全体についての包括的、概括的な見取り図をもっていることが必要です。自分がこの社会のどのポジションにいて、今進んでいる道はどこに向かっており、その先にはどのような分岐点があり、それぞれの分岐点はどこにつながっているのか。それが分からないものにはマッピングはできません。

マッピングができないということは主体性が持てないということになります。というのはマッピングというのは、「自分がいる場所」、つまり「空間において自分が占めている場所」、つまり、「他の誰によっても代替不可能な場所」を特定することであるからです。

マッピングのための問いとは、「私はどこにいるか?」「私はなにのものであるのか?」「私は何ができるのか?」という、そういう問いかけではなく、「私はどこにいないのか?」「私はなにのものでないのか?」「私は何ができないのか?」という否定的な問いではないでしょうか。自分は何を知らずに、何ができないかということのを正しく把握して、言葉にして、それをどうやったら「得る」ことができる機会と条件について学び知ること。そういうことを考えるのが勉強でないか、と思います。あらゆることはそういうふうにつながるようになります。何よりも「自分はどのようなデータを欠いているのか。自分がそのようなデ

一々に達するために、どのような技術を欠いているのか」というのを、できる限りわかりやすいことばで相手に伝える必要があるからです。

今、いろいろなところで何かあるとすぐマニュアルがなかった、すぐマニュアルをつくれ、と。でも、いろいろな職業の現場というのはマニュアルにないことが起こって、基本方針そのものを揺るがすような判断を迫られるという場です。小さいマニュアルではなく、おおきな判断のためにも、自分の位置をふだんから検討しておくマッピングが必要になってくるわけです。

それでね。理想を持ってみんな言いますよね。でも理想と現実の落差は大きいですよ。私たちはその落差をてがかりにして、自分が「何ができないか」「何を知らないのか」「どこにいないか」「誰でないのか」について、持っていないことについてのデータを詰めていくのです。マッピングは、誰にも代えられない、かけがえのない自分の位置を知ることだと思います。

高い理想を持つものは、低い理想を持つものより、失敗する確率が高い。だからこそ高い理想を持つことが称賛されるのです。たくさん失敗した者の方が、自分についてより多くのデータを採集でき、自分をよく知ることになると思います。結果的には自分のアイデンティティーについてより確信を深めることができるからです。私が申し上げたかったのは、鳥の目を持つとうとして、マッピングをする努力なしに、何が分かっているのかということ自分で規定できないということです。

きょう、ここにいるのは、現在十五歳から十八歳のみなさんです。直感的に、これからの日本が楽な時代でないことは感じているはずですよ。そのことについて、少子化や、財政赤字だとかについてくどくどしく言わなくてもいいですよ。みなさんがこれから出ていく日本の社会は、楽な時代でないことを皆さんは直感的に知っていて、その直感はおそらく正しい。皆さんが十年たって人の親になるころは、日本はもっとひどくなって、生活水準も、知的水準もいま以下になっているだろうという予測のもとに生活設計をしていかざるをえないでしょう。みんなが松井や中田のようにニューヨークやイタリアに行くのは不可能です。

自分の規定されている条件。現在の世界の中で、どれだけの教育を受けて、どれだけの言語能力を持ち、どのような本を読み、どんな事件に反応して、どうしてそのように考えるのか。どうしてそのようなことをいうのか。そう考える、そう語る自分がいることをできる限り、その外側から鳥の目で見つめようとする努力。その立つ位置をなるべく規定することを続けたいと思います。旅をして物を見るということは、自分のよってきたことが

ら規定される見方の条件を捨ててみる努力ではないでしょうか。

今という時代は、私たちの世代が繁栄を謳歌したように豊かでやさしい時代ではないことを、みなさんは直感していると申し上げました。日本は近代化を終え、国が小さくなっていきます。大学の数も減ります。みなさんが入った大学はひょっとしたらなくなるかも知れない。それをみなさんは自分で判断しないとイケない。だから、まず、生き延びてください。

私は、この学舎を巣立ち、たまたま五十六の国と地域を旅して、三十年後の今、ここに帰ってきました。ここにいるみなさんたち、多くの方々が、きっと世界へ出ていくと思います。二〇〇八年には、火星有人飛行計画もあるし、地球の外に出ることもできるかも知れません。そして外に出たみなさんもきっと、私のようにかつて学んだここに帰ってきて、幸福な気分を味わうことができるでしょう。

みなさんのご健闘を祈ります。ありがとうございました。